

令和元年6月24日現在

機関番号：16201

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K20820

研究課題名(和文)在宅で過ごす認知症療養者のスピリチュアルペインの把握

研究課題名(英文)Spiritual Pain of older adult with dementia at home

研究代表者

沖 亞沙美(Oki, Asami)

香川大学・医学部・助教

研究者番号：70774024

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究によって、認知症高齢者にスピリチュアルペインが存在していることが明らかとなった。研究協力者は、通所介護型施設を利用する認知症高齢者1名を対象に、参与観察によって得られたデータを収集し、現象学的に分析を行った。研究協力者は、認知機能の低下に伴って、自分が自分でなくなっていくような感じや、生きている意味がないのではないかと考えた経験があることや、家族や超越的な存在との関係性の中で、申し訳ないことをしていると考え、孤独感や疎外感を感じていることがわかった。それらのスピリチュアルペインは、時間、環境、関係性の中で、苦悩が高まったり、逆に癒さったりしていることが明らかとなった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の意義は、認知症高齢者自身を研究協力者として参与観察を複数回行うことで、様々な示唆を得られたことである。認知症高齢者の精神的、身体的、社会的苦痛を包含する形で根本的なスピリチュアルペインとして表出されていた。研究協力者自身の壮年期に獲得した能力や役割に近い役割を、通所介護施設でも遂行していること、壮年期までに獲得した感覚や質は、生活の中でも生かされており、それらの能力にサポートする側が気付くことが、お互いに尊重してケアを提供しあえる関係性に発展することが示唆されたこと、障害されている脳の部位を検討したうえで、低下が著しくない機能維持の訓練が有用であることが考えられた。

研究成果の概要(英文)：It was found that a spiritual pain was present in elderly people with dementia by this study. The study cooperater is an elderly person with dementia using Day caring servise center. We analyzed the data which we collected by participant observation in phenomenology. The study cooperater was found to have various experiences with the decrease of the cognitive function. (1) The feeling that oneself is not oneself, (2) Have an experience of having thought that there may not be a meaning living for, (3) In a relationship with a family and the transcendence-like presence, think that I am sorry for what I did, and feel feeling lonely and sense of estrangement. It was found that those spiritual pain increased suffering in environment, a relationship or a time but it was healed in those dimensions too.

研究分野：高齢者看護 在宅看護

キーワード：認知症 高齢者 スピリチュアルペイン 在宅 現象学

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

日本は超高齢社会を迎えており、高齢者のケアをより充実させていくことが求められている。老年期は、死に向かう自らの人生の終焉を受け入れていく段階にあり、Erikson, H. の発達課題では老年期は「叡智を駆使しながら絶望を克服し統合の感覚を獲得する」という発達課題を有しているといわれている。Erikson, J. は、人生周期の中に老年期の第 8 段階の後に新たに第 9 段階を加えた。この変化は、Hyse, K. & Tornstam, L. が述べている老年的超越の概念と関連があると考えた。この老年的超越では、現実に存在する物質世界から実際には存在しない精神世界への、世界に対する認識の加齢変化と定義される。その心理発達の過程ではスピリチュアルな側面に目を向けることが求められる。

わが国の認知症高齢者数は、2012 年に 462 万人であり、2025 年には約 700 万人と推計されており、今後さらに増加することが見込まれている。そこで、認知症の早期診断・早期対応を起点に認知症初期集中支援を今後強化するために 2012 年にオレンジプランが策定された。

認知症高齢者のスピリチュアルペインに関する文献を国内外で概観すると、国外では専門職を対象とした認知症高齢者のスピリチュアルニードやスピリチュアルケアについて検討した文献があった。Blinkman, A. は、オランダの病院や地域で医療を提供している専門職 4930 人を対象に、亡くなる 1 か月間に、関わっている患者が必要としたケアについて質問紙を用いて郵送調査を行った。その調査によりオランダの終末期医療では、ナーシングホームで亡くなる認知症高齢者の女性が、サイコロジストやスピリチュアルケアワーカーのサービスを活用していた。この結果から認知症高齢者の女性は、精神的ケアやスピリチュアルケアを必要としていると考えられる。また、Ennis, M. は、文献研究によって、認知症高齢者のスピリチュアルな看護実践における有用な介入を検討している。スピリチュアルな看護ケアは、その看護活動と方策によってクライアントにスピリチュアルな生活の質や幸福と機能の営みをもたらすと述べており、看護師が行っているケアは多くあるが、音楽療法と、霊的な儀式が有用な介入であると述べている。

国内では、スピリチュアルペインの研究のほとんどは、終末期がん患者を対象としていた。そのほかの対象として日本人高齢者や HIV 患者、ハンセン病患者を対象とした研究があった。認知症高齢者を対象としたスピリチュアルペインに関する研究は 2 件であった。先行研究から、認知症高齢者に、スピリチュアルペインが認められることはわかっているが、その実際の内容や認知症高齢者に対する有用な介入としてのスピリチュアルケアの研究は、研究が蓄積され、検討されている段階と考える。

看護師は、認知症高齢者や家族の視点を重視し QOL が低下せずに生活するための看護ケアを検討していく必要がある。研究協力者は、認知症という記憶障害や認知障害などを主として、慢性的に進行する疾患を有しているため、研究を行うことが難しい面がある。しかし、認知症高齢者が語る、認知症にともなって体験するスピリチュアルペインの内容を少しずつでも研究し蓄積することで、適切なスピリチュアルケアの検討ができると考えた。

2. 研究の目的

本研究は、在宅で過ごす認知症高齢者が体験するスピリチュアルペインの内容を明らかにすることを目的とする。

3. 研究の方法

(1) データ収集方法

研究協力施設は、関西圏にある通所介護施設 1 施設である。データ収集は、2018 年 4 月～6 月の期間において、週 1 回の頻度で実施した。ゲートキーパーを通して背景と属性（年齢、性別、婚姻、就労形態、信仰の有無、日常生活動作）、服薬状況について確認した。同意を得たうえで、研究協力者が現す内容をテープ録音し、得られたデータから逐語録を作成した。研究協力者の表情やしぐさ、その場の様子で特に印象深かったこと、その他の気づきについては、研究協力者から離れた場所に移動した際にノートに記入し、フィールドワーク（以下 FW）で収集したデータをまとめ合わせてフィールドノート（以下 FN）として現象学的アプローチで分析した。また、研究者は、参与観察方法において観察者としてデータ収集を行った。これは、現象学の研究会に所属し、認知症を専門に研究し、現象学的分析方法に精通した老年看護学の研究者に、認知症高齢者が体験するスピリチュアルペインの本質的な内容を明らかにするためには介入やインタビューを行わず、認知症高齢者からその内容がでてくるまで参与観察方法で観察者としての立場をとるよう助言あったためである。

参与観察方法は、1 回の共有する時間は、30 分～1 時間程度とし、研究協力者から話しかけてこられた場合に非構成的面接法を行い、通所介護施設での機能訓練や隣席者との会話が始まったときには、席を離れて、参与観察法を行った。参与観察方法で収集したデータの不明瞭な部分を研究協力者へ確認を行い、研究協力者と研究者との間に解釈や認識の異なりが生じないように努めた。通所介護施設では、ゲートキーパーの支援によって、まず施設を利用している認知症高齢者同士が集まるテーブルに研究者が同席し、計 6 回の参与観察法を行った。収集したデータの不明瞭な部分を、参与観察法の終了後通所介護施設の時間の中で研究協力者へ確認を行い、研究協力者と研究者の解釈との間に認識の異なりが生じないように努め、認知症高齢者同士が語る内容も含めてデータ収集した。

通所介護施設の利用者の中には、テープ録音することを伝え、症状が悪化する可能性がある認知症高齢者が利用していたため、ゲートキーパーに確認しながら、必要に応じて説明し同意を得た。

(2) 認知症高齢者の体験するスピリチュアルペインの内容を探究する方法

本研究では、認知症高齢者1名を研究協力者として選定しているが、なぜ現象学的アプローチを選択したかを述べる。本研究では、認知症高齢者が体験する病理的な現象、あるいは潜在的に困惑するような現象を扱う。そして、認知症高齢者が体験する生きられた出来事の局面をできる限り正確に叙述し、これらの現象の不変的な本質を探究する。現象の本質としてのスピリチュアルペインの内容に関する感受性のある表現を、可能な限りわかりやすく明示することに挑戦している。これには、現象の内容を類比して捉え、抽象化する研究方法では、認知症高齢者が体験する生きられた出来事の局面としての病理的な現象や潜在的に困惑する現象が、一つ一つの言葉の意味のなかに、本質が埋もれたり含まれたりしてしまう可能性があるため適さないと考えた。Giorgi, A. は、「ある具体的な経験の叙述を、心理学的に意味のある仕方でのようにして分析し、そして、量的分析が到達するのと少なくとも同程度の客観性を、どのようにして達成するのか?」という問いを、現象の構造そのものを明らかにすることで得られるとしている。それには、生データのバリエーションを持たせるために、少なくとも3名の被験者が必要だと述べられている。しかし、本研究では、1名の研究協力者の生きられた出来事を分析する。そこで、計6回の参与観察法によって得られた叙述の中に含まれている現象事例を、無数に変化している局面として捉え、現象の本質を探究した。

(3) 分析手順

現象学的分析作業として、具体的な手順は以下となる。まず、すべてのFNを繰り返し読み、じっくりと味わった。

センテンス毎に区切り、全体の会話の場면을複数回読んだ。それをスーパーバイザー、臨床経験35年のエキスパートナースと研究者とで意味内容の分析を行った。さらにセンテンスから意味のある単位(以下、意味単位)毎にまとめた。

分析のプロセスでは、意味単位毎に研究協力者の生きられた時間存在としての時間と、環境との相互作用、研究場面における関係性を考察し、特に、スピリチュアルペインの内容にフォーカスをして、()スピリチュアルペインの言説、および内容の抽出()スピリチュアルペインが緩和された場面と言説の抽出、()その場面における研究協力者のヘルプとケアを提供する援助者のサポートやケア、あるいは認識の差異について着目した。

上記を繰り返すなかで、スピリチュアルペインが強くなる、あるいは緩和される表現、印象的な場面また言説などが見えてきた。

それらに関連するFNすべてを再度分析し、図式(シェーマ)化した。それによって批判的に研究協力者の生きられた体験への接近を試みた。

これらから、現象の本質として構造を明らかにするために、注目すべき場面の意味単位を、研究協力者の視点から、研究協力者はその状況を如何にして生きたのか、ということに焦点を当て、何が知覚されたかということを示した。

それを一般化することで文脈のなかの要素とし、心理学的不変性をもつスピリチュアルペインの内容に関する意味を探究し構造化した。

(4) 分析の真実性・妥当性の確保

データ分析の真実性・妥当性を確保するために、分析の全過程において、Giorgi, A. の現象学研究会に席をおいている地域・老年看護学研究者と、臨床経験35年のエキスパートナースであり認定管理者ももつ質的研究者からスーパーバイズを受け記述の検討を重ねた。在宅看護学領域の教授からスーパーバイズを受け記述の精度を高めた。また大学院ゼミにおいても複数回発表し、ピアレビューも行った。

4. 研究成果

スピリチュアルペインの言説および内容として、3つに分類された。1つ目が、自分が自分ではなくなっていくような感じ(自己存在の揺らぎ、喪失)、2つ目が、生きている意味がないのではないかと考えたことがあること(生の無意味)、3つ目が、家族や超越存在に申し訳ないことをしていると考え、孤独感や疎外感を感じていることであった(関係性の中での孤独感、疎外感)。これらの3つを象徴する印象的な体験が含まれていた。

(1) 自分が自分ではなくなっていく

Aさんは、過去の記憶を頼りに以前Aさん自身が、できていたこと、みていたこと、知っていたこと、きいていたことを何度も思い出そうとしている。しかし、今のAさんにとって、そのことを思い出すことはできない。Aさんは、過去と現在を行ったり来たりしながら、Aさんが思い描いている今の自分と、思い出すことができるはずなのに思い出さず自分と比べて、「わからない」と様々な場面で、苦悩していた。記憶の中の自分は、できていたはずなのにできない、みていたことがあるはずなのに、知っていたはずなのに、聴いていたはずなのにわからない、という体験をしている。その体験は、自分をなくしてしまったような喪失、わ

かるようでわからないという不明瞭なことへの悶え、または忘れてしまうことへ抵抗することで現れていた。A さんの中にある、過去の自分と現在の自分の差異を含む体験の構成を、喪失を認めたくない、不明瞭なことへの心情的悶え、忘却することへの抵抗、という視点で記述した。

(2) 生きている意味がないのではないか

デイサービスでは、A さんは、気遣いのできる利用者の一人として過ごしている。認知機能が低下していることや低下していないことは関係なく、利用者同士で関係性を気付きながら、デイサービスという環境の中で過ごしている。利用者同士の関係性の中では、お互いが笑顔で話し合える良好な関係性もあれば、お互いがそっぽを向きあっているような悪化している関係性もある。A さんの場合は、良好な関係性の中では、自己開示することができ、利用者同士でのサポートしあうことができていた。その関係性の中で、A さんが、他の利用者の話に共感しながら、自己開示し、日ごろから感じている思いの一端を話す場面を切り取った。A さんに内在していた、現在の自分の状態と、未来の自分への示唆を含む体験を、向こう側の世界への示唆、身体が衰えていくことへの嫌悪、という視点から記述した。

(3) 家族や超越存在に申し訳ないことをしている

A さんは、数年前に夫を亡くしており、現在は、娘と同居している。娘にどこかに行こうと誘われも、同居しているということが娘の負担になっているのではないかと考えているため、そのうえ、どこかにでかけるとなるとさらに A さんは、娘に気がつかってしまう面がある。同居していない息子家族と過ごすときは、家に帰ると娘に対して申し訳ないと思ってしまう自分から少し距離を置くことができる。以前、家族のために働いていた時の忙しくしていた時間を恋しく思い、現在の家族に対して何もすることがない時間を、持て余していることに対して、自己価値が揺らいで、家族に対して申し訳ないと感じて生活している。A さんの今まで構築してきた関係性の中で自己価値が揺らくことで表出されていた、孤独感、疎外感を感じている体験を、他者との関係性の再構築の途上、という視点で記述した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 0 件)

〔学会発表〕(計 2 件)

The 6th joint symposium between Kagawa University and Chiang Mai University (2016)
日本看護科学学会 (2016)

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕

出願状況 (計 0 件)

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

出願年：

国内外の別：

取得状況 (計 0 件)

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

取得年：

国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名：

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：

研究者番号(8桁)：

(2)研究協力者

研究協力者氏名：

ローマ字氏名：

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。